

## 古本説話集の文章：宇治拾遺物語との比較を通して

高橋，敬一  
福岡女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/10504>

---

出版情報：文献探究. 10, pp.7-16, 1982-09-15. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



## 古本説話集の文章

——宇治拾遺物語との比較を通して——

高橋敬一

古本説話集の文章について考察しようとする場合の、一つの有効な方法としては、ほぼ同時代の説話集である打聞集、今昔物語集、宇治拾遺物語などの関係で論じることであろう。

たとえば、古本説話集を中心に論じたものではないが、これら四書に重複する説話（共通説話）を比較検討し、「打聞集、今昔物語集の表現は古本、宇治よりも近く、古本説話集、宇治拾遺物語の表現は今昔よりも近しい」という結論を導き出された高橋實氏の論<sup>(注一)</sup>・今昔物語集と他の三書に存する共通説話を、今昔物語集の仮名書語を中心に比較検討し、「今昔物語集との比較で言えば、打聞集・古本説話集・宇治拾遺物語の順で本文が遠く行って行く傾向が見られる」という結論を導き出された山口佳紀氏の論<sup>(注二)</sup>などは、このような方法で論じられたものである（古本説話集が短小な作品であるためか、これだけを対象として論じられたものはほとんどない）

ところで、これらの論文からもわかることだが、古本説話集と宇治拾遺物語の共通説話の文章は非常に近く、細部まで一致

するいわゆる同文説話が、日本古典文学大系・宇治拾遺物語説話目録によると二〇話も存するということである。

しかし、これら同文説話相互の関係については、口承説話を別々に採り入れたものであったとか、先行の散佚説話集を共通母胎として、そこから分かれたものであったとか説明され、直接の書承関係がないというのが定説である。

また、同文説話と書いても二つの文章を細かく点検してみると、全文が完全に一致するものはほとんど見られず、何らかの点で相違している。その中には、ほぼ同じ系統の作品の写本を校合してみられる異同ほどの相違しかないように見えるものもあるが、わずかな異同でも決して無視できない表現上の相違を含んでいる場合もある。（ただし、古本41「貫え赴土左任事」宇治40「つらゆきうたの事」は、短文ではあるが全文完全に一致する）

このように考えると、古本説話集と宇治拾遺物語の同文説話相互の関係——二つの文章の関係は、同一の素材を二通りに表

現した文章と言うことができる。すなわち、古本説話集の文章の特徴をとらえようとする場合、従来の研究方法でもあるが、このような関係にある二つの文章を比較検討して、その相違点共通点を探り、表現の特徴をとらえるという方法、特に、宇治拾遺物語との間に存する同文説話の比較を通して特徴をとらえる方法が有効になる。

永積安明氏は、「宇治拾遺物語の世界」(「文学」昭和三九年一月)の中で、古本説話集の表現が、宇治拾遺物語よりも、もっと源氏物語の和文の用法に近いことを、漢文訓読語の使用度ということから実証され、更に両書の表現上の差異について

『古本』と『宇治』との用語を、さらに個別的に比較してみると、たとえば敬語や時相等について、また文の論理的脈絡において『古本』は一般に、きわめて明確な表現が保たれている。また係結が、使役等における助詞・助動詞も平安時代の和文の形式が、そのまま使用せられている。『宇治』には、これらの古代的な文章表現の形式が、ソボはくずれている。(圏点筆者)

と述べられ、結局、両書の表現を、宇治拾遺物語の「話し言葉(俗語や時代語による口語表現)」に対して、古本説話集のそれを「雅語的表現」と結論づけておられる。

ここで筆者が特に注目したのは、右の引用文中にも圏点を

施したが、宇治拾遺物語と比べて、古本説話集の文章——文と文の連接関係——が、きわめて論理的であるという点である。従来、このような観点から、古本説話集の文章の特徴が指摘されたことはなかったし、その後この点について詳しい論究があったことも知らない。

そこで本稿では、宇治拾遺物語との間に存する同文説話二〇話の中から、更に異文数の少ない十五話を選んで、本文の異同——文と文を結ぶ連接部分の接続語句の異同——を調査し、また両書における文連接関係の様相の違いを報告したい。そしてそれを手がかりとして、古本説話集の文章について、たとえは先にみな永積氏の指摘されたことなどについて考察を加えてみたいと思う。

尚、本調査の対象とした両書の説話は次の通りである。

古本説話集——11 18 20 21 22 25 27 38 40 41 57 58 59 65 69  
宇治拾遺物語——46 40 41 42 43 44 47 48 49 86 96 131 101 89

(二)

古本説話集と宇治拾遺物語の本文(同文説話)を比較すると先に述べたように文と文の連接部分の接続語句に異同がある。その異同を内容的にみると、多くが接続助詞が用いられている

かいたい及び接続助詞の種類の違いであつて、接続詞 指示語の異同は認めらぬ。

両書の比較を次のように分けて試みる。

(A) 古本説話集は接続語句がなく文が終止するが、宇治拾遺物語は接続語句を用いて文が続く場合

(B) 古本説話集は接続語句を用いて文が続くが、宇治拾遺物語は接続語句がなく文が終止する場合

(C) 古本説話集、宇治拾遺物語ともに種類の異なる接続語句を用いて文が続く場合(尚、この中には接続語句は用いなく、どちらか一方が連用形中止法をとつて続く場合も含めてゐる)

尚 例示は古本説話集の本文を示し、宇治拾遺物語の異文は( )で示す。ただし、文と文の接続部分の異同のみはへで示す。

(A)の例について

(1) 古本は文終止、宇治は接続助詞「ばし」を用いる

① 「年三十ばかりのまのこの鞍黒子が、(略)葦毛の馬(折カ)のに乗(と)りてぞんくべき。それを観音としりたてまつるべし」といふ(と)みかだに夢すめぬ。おどろきて、(夜ありて)人々に告げまほし

語りかければ、人々聞き継ぎて、その湯に集まること、かぎりなし  
(古本 69 宇治 89)

(2) 古本は文終止、宇治は接続助詞「てし」を用いる

② 「不更にさぶらふ(御)ことかな。水候所はとをまき也。汲みて帰(下)りまいらば、ほど経候なん。此水はソカ(カ)とて、包みたる柑子を、三つながら取らせたり(下)は、(古本 58 宇治 96)

③ 京すまにのぼるほどに、宇治邊にて日暮れにければ、その夜(と)・ひとのもとに泊りて、いまひとむらの布して馬の草やめが食物などにかへて、その夜は泊りぬ。翌朝、いと疾く京すまへのほりければ、九条邊なる人のいゝに、物へ行かぬするやうにて、立ちすはぐ所あり。(古本 58 宇治 96)

(3) 古本は文終止、宇治は接続助詞「に」を用いる

④ 「此水をほいかに(と)すべきならん」と思ひて、引きひろげて見て、「着るべき衣も(衣)さほ此水を衣にして着む」と思ふ心つきぬ。(古本 59 宇治 91)

⑤ 「いかやうにてかおほいさんずる」といふ。いらぶるやう「(略)」といふみかだに、夢すめぬ。(古本 69 宇治 89)

(二) 古本は文終止、宇治は接続助詞「が」を用いる

⑥ 其後、いくほくもなく<sup>(1)</sup>て、主のもとにありけるをなじやうなるさぶらひと、雙六を打ちあひにけり<sup>(2)</sup>。多く負けて、渡すべき物なかりけるを、いたく責めけ水は、思ひぬけて、(古本57 宇治86)

(ホ) 古本は文終止、宇治は「時」を用いる

⑦ この憎、く々の夢にみえけるやうを語る<sup>(3)</sup>。この男いふやう、「まのれは、さいつころ狩をして、馬より落ちて、右の脇をうち折りにれは、それ<sup>(4)</sup>・茹<sup>(5)</sup>でもとて、まうでまたる也」といひて、(古本69 宇治89)

用例は、以上七例である。それぞ水につつて、少し説明を加えておく。

① につつて 古本の該当部分の前文と後文は、「前文の文末が切れ、後文の文頭が前文関係的にはじまる」形式になつてゐる。すなわち、前文末は「人々に告げまほし語る。」、後文頭は「人々聞き継ぎて」となつており、前文の要素「人々」が後文では冒頭にきて文が始まつてゐる。ただし、両書の本文を

比べてみると、古本の本文は、「おどろきて」が後から付け加えられた形になつてゐるし、宇治では、「夜あけて」から人々に告げまわつたというように、自然な時間的経過を明示する語句があるが、古本では脱落してゐる。古本の筆録者は、このあたりあまり文脈を考えずに二文に分けてしまったようにも考えられる。

② につつて 該当部分は会話文中である。内容的にみると古本が、水がある所は「遠き也」と断定し、単文を重ねてゐるのに対し、宇治は、水がある所は遠いという事實の存在を確かめた上で、その水を汲んでもどつてくるには時間がかかるという、もう一つの事象が離起することを示す接続助詞「て」を用つて文が續いてゐる。

③ につつて 古本は、表現が単調にすることを避けてゐる。前文の内容をみると、二つの内容に分けられ、それぞ水が「その夜ひとのもとに泊りて」、「その夜は泊りぬ」と同じ表現でまとめられてゐる。それぞ古本は、二つ目の文末を終止し、一応まとまりをつけ、同じ表現のくり返しを避けてゐるが、宇治は、連続的に表現してゐる。

④ につつて 古本の文脈には問題がある。すなわち、古本のように終止せず、宇治のように「着るべき衣かなりので」と逆接条件の形で後文にかかつていくのがよい。ただし、例示し

たように、「なししが傍書されたものであることは注目される  
該当部分は会話文中である。

⑤についで 該当部分の前文と後文の關係は、復問、応答  
であるから、古本のように「と言ふ。」で終止するよりも、  
治のように「と問ふに」、それに對して「答ふるやう」と続け  
た方が、文脈は明確である。

⑥についで 古本の本文をみると、このあたりは説話の冒  
頭部分で、「宮仕へしてあるなま侍ありけり。」と、「ひとまね  
して、千度詣二度ぞしたりける。」と、主人公についで單文を  
連ねて説明してゐる部分であり、該当部分の前文もその一つと  
考えられる。

⑦についで 形式名詞「時」を用いる字治の方が、表現と  
しては論理的であると言える。

(B)の例について

(イ)古本は接続助詞「ば」を用いる、字治は文終止

①三つ、いとかうばしきみちのくに紙につみみて、取らせたり  
ければ、<sup>(侍)</sup>とりつたへて、あぶとりける侍、とらせたりけ  
ば、<sup>(兼)</sup>兼とすぢが、大柑子三つになりぬることと思ひて、

(古本 58 字治 96)

②この女房、「我はは喉かほきて絶え入りたりけるにこそ有  
けれ。(略)うれしかりけるおとこかな。二のおとこはまだ  
あるか」と問へば、「かゝるにまだ候しと言へば、<sup>(申す)</sup>「そのお  
とこ暫しあれと言へ。(略)二のおとこのうれしと思ふはか  
りの事は、かゝる旅にてはいかげせんずる。」とて、(古本  
58 字治 96)

③「かうく候。御悩の大事におほします。祈りまいらせ給は  
むに」といへば、「それは唯今まいらずともこゝながら祈り  
まいらせ候はん」といへば、<sup>(給ぬ)</sup>「さてはもしをこたらせおほ  
ましたりとも、いかに聖のしるしとほするべき」といへば、  
(古本 65 字治 101)

④御心ちさはくとなりて、いさゝか心苦しき<sup>(御)</sup>こともなくて  
例すまにならせ給にければ、<sup>(給ぬ)</sup>人々喜びて、<sup>(御)</sup>聖をたうとがり  
めであひたり。(古本 65 字治 101)

(ロ)古本は接続助詞「を」を用いる、字治は文終止

⑤起きあがりたるに、<sup>(あるに)</sup>手にあれにもあらず<sup>(手)</sup>握られたる物を見  
れば、<sup>(兼)</sup>兼の筋といふ物の、<sup>(兼)</sup>たゞいとすぢが握られたるを、<sup>(兼)</sup>「  
たぶ物にてありけるにやあらん」と、いと物はかなく思へ

ども、(古本58 宇治96)

(ハ)古本は接続助詞「と」しを用いる、宇治は終止

⑥さてのち、(そこより)行く方もなくて失せにけり、有ところ  
も知らずなりにけり。(古本40 宇治148)

(ニ)古本は係助詞「は」しを用いる、宇治は文終止

⑦さてまた、まどろみ入りたるに、又夢に、「なごさかしうは  
あるぞ、たゞ給ほん物をば給はらで、かく返しまいらすは、  
みやまこと也して、又給はると見る。(古本59 宇治13)

用例は、以上七例であるが、文意あるは文脈上いくぶん問題があるものがある。それゆゑについで少し説明を加えておく

①についで 古本の文意に問題がある。すなわち、前文の内容をみると、宇治は正しく「若君がアブをもらったおれとして、大稚子をさし出したのを、従者の侍が、アブを待たつた侍に渡した」という内容であるが、古本の場合、「あぶとりける侍」が文脈の中に取り込まれたために、それが「取らせたりけりほしの主体になつてしまつて、文意に誤まりが生じている。

②についで 宇治の方が、古本より文意は明確である。すなわち、ここは、女主人が従者に質問、従者が応答、更に従者に命令という展開をしているところであるから、古本のように順接の確定条件で文を続けるより、宇治のように従者の応答部分で一応文を終止した方が文脈がはつきりする。

③についで 古本の文脈は、同じ表現をくり返し、そのため表現が単調になつてゐる。すなわち、このあたりの前後の文に注目してみると、古本は「と言へば」の形で結ばれた会話文が六回連続してゐるのであるが、宇治の場合は、そのうち一つを該当部分のように終止形で結び、更にもう一つを「と言ふに」と表現をかえ(②参照)、同一表現のくり返しを避けてゐる。

④についで 古本の文脈の方が、宇治より明確である。

⑤についで 両書の前文をみると、古本は「葉の筋といふ物たどむとすぢが握られたる」と格助詞「が」が用いられてゐるのに対して、宇治は「葉筋といふ物のたどむとすぢ握られたり」と格助詞「の」を用いてゐるといふ相違がみられる。

⑥についで 古本には文脈上に明らかな誤りがある。すなわち、山内洋一郎編『古本談話集総索引』にも、「逆接表現がくるのは不審。今昔に見る如き教文を要するところを、無理にはしおつて語を終えたための現象か」といふ注があるように、古本に誤りがある。

⑦についで 古本の文脈の方が、宇治より明確である。ただし、該当部分は、「返らまいらすぞはし」が、「返らまいらするはし」に改められたものであることは注目される。会語文中である。

(c)の例についで

(i) 古本は接続助詞「ばし」、宇治は接続助詞「に」を用いる

① 東大寺の仏の御前に候て、<sup>(ある)</sup>「ソづくにかをこなひして、のどやかに住みぬべき所<sup>(ある)</sup>」と、よろづのところを見廻し<sup>(入ける)</sup>ければ、未申の方に<sup>(あたりこ)</sup>山かすかに見ゆ。(古本65 宇治101)

② 御使の蔵人、「さるにても、いかでかあまたの御祈りの中にも、そのしるしとみえんこそ良からめ」といへば、「さうば祈りまいらせん。(略)さうに京へはえいぞじし」といへば、(古本65 宇治101)

(ii) 古本は接続助詞「ばし」、宇治は接続助詞「てし」を用いる

③ 「御のど湯かせ給<sup>(給て)</sup>ければ、「水飲ませよ」と仰せられつるまゝに、御とのごもり入らせ給<sup>(給て)</sup>へれば、水もとめまぶらひつれ

ども、清き水もまぶらはざりつるに、(略)まいらせたりつるせしといふに、(古本58 宇治96)

(ii) 古本は接続助詞「ばし」、宇治は「程に」を用いる

④ 「左の水は、ソソつごう狩をして、馬よりおちて、右の腕をうち折たれば、それ<sup>(ま)</sup>ゆでんとて、まうできたるせしといひて、とよまか<sup>(ま)</sup>く<sup>(ま)</sup>す<sup>(ま)</sup>れば、人々しりにたちて、拝みのしる。(古本69 宇治89)

(ii) 古本は接続助詞「どし」、宇治は接続助詞「ばし」を用いる

⑤ 「こはソかゝせんする。御放籠馬<sup>(ま)</sup>や入りたるし」と問へば「遙かにをく水たり」とて、見えず。(古本58 宇治96)

⑥ 「さほど使はせ給<sup>(給て)</sup>候ばかりを十廿までも<sup>(奉らん)</sup>といへば、「さまでもいるべき事のあらばこそと<sup>(ま)</sup>い<sup>(ま)</sup>めい<sup>(ま)</sup>し」とて、(古本65 宇治101)

(ii) 古本は係助詞「はし」、宇治は接続助詞「ばし」を用いる

⑦ 「かくみながちに申<sup>(申せば)</sup>は、いとをしくおぼしめせど、少一にて



もあるべきたよりのなげれば、その事をおぼしめし、歎くなり。これを給はれしとて、(古本59 宇治31)

(1) 古本は「まゝに」、宇治は接続助詞「ばし」を用いる

⑧ すべき方もなかりけるまゝに、<sup>△付れば</sup>「観音助けさせ給へし」とて、長谷にまゝりて、御前にうつぶしふして、(古本58 宇治96)

(1) 古本は「事」、宇治は接続助詞「ばし」を用いる

⑨ 「(略)後は知らぬど、かくまで侍事、<sup>△付れば</sup>明後日ばかり、又まゝり侍らん。よき様に申させ給へし」とて、罷り出でぬ。(古本11 宇治46)

(1) 古本は「程に」、宇治は接続助詞「してし」を用いる

⑩ 「(略)よろづの人の欲しがりて、値も限らず買はんと申つるをも、<sup>△付れば</sup>放ち給はざりつる程に、今日かく死ぬれば、<sup>△付れば</sup>その値一疋をだに、取らせ給はずなりぬ。(略)しとひけはば、(古本58 宇治96)

(1) 古本は連用形中止法、宇治は「てし」を用いる

⑪ さて、この侍<sup>△付れば</sup>三日見えがかりければ、あやしがり、<sup>△付れば</sup>峠、尋ねさせければ、その北山に、たうとき山寺にいみじま聖ありけり。(古本40 宇治48)

⑫ その戯にせ福だいの破水などは収め、<sup>△付れば</sup>まだにめん<sup>△付れば</sup>なる。(古本65 宇治101)

(1) 古本は接続助詞「てし」を用いる、宇治は連用形中止法

⑬ 「二千度まゝりつること、それがしに雙六にうち入れつと書きて、取らせたりければ、受け取り、<sup>△付れば</sup>喜びて、臥し拜みて、<sup>△付れば</sup>罷り出でにけり。(古本57 宇治86)

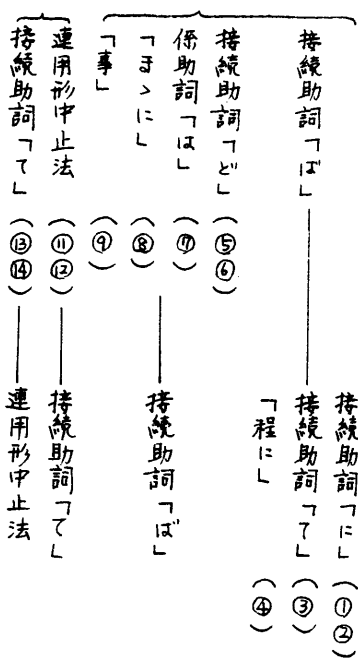
⑭ 御心ちさはくと罷りて、いさ、か心苦しま、<sup>△付れば</sup>こともなくて例さまにむらせ給にければ、人々喜ば、<sup>△付れば</sup>聖をもちたうとがり、めであむたり。(古本65 宇治101)

用例は、以上十四例である。注目すべき点について少し説明を加えておく。

③ について 古本は同じ表現のくり返しを避けてゐる。すなわち、該当部分の少し前をみると、類似の表現「御喉のかは

かせ給て、水召さん口と仰せらるゝに」があるが、それを避けた表現と思われる。ただし、宇治の場合も前の表現は、「御喉かかせ給て、水ほしからせ給に」となっており、やはり、該当部分とは別表現になつてゐる。

⑬について 該当部分の前後の接続語句の用い方をみると宇治の方が細心の配慮があるように思う。すなわち、古本は、「(喜ま)て、(取らせたりけり)は、(受け取り)、(喜か)て、(取し揉み)て」となつてゐるのに対して、宇治は、「(喜ま)て、(取らせけり)は、(受け取り)つゝ、(喜か)て(取し揉み)しとなつており、文脈がソクぶん明確である。次に、(C)の全用例について、これを対応する接続語句でまとめると次のようになる。(上段古本、下段宇治)



「程に」——「して」(⑩)  
 両書の間接続語句の対応は、主として接続助詞「は」とその他の接続語句と対応するもの、連用形中止法と接続助詞「て」と対応するもの二通りである。ただし、接続助詞「は」と対応する接続語句が古本と宇治では全く相違してゐることは注目される。

(三)  
 古本説話集と宇治拾遺物語の同文説話における接続語句の異同をみてきた。それらをまとめると次のように三つの場合に分かれ、用いられた接続語句も接続助詞を中心に数種類ずつあった。

△古本△(接続語句) △宇治△(接続語句)  
 (A) 終止 …………… 接続(は、て、に、が、時)  
 (B) 接続(は、を、ど、は) …………… 終止  
 (C) 接続(は、て、ど、は) …………… 接続(は、て、に、して、  
 程に、まゝに、事) 程に)  
 用例数は、それぞれ(A)七例、(B)七例、(C)十四例である。次に、これらがそれぞれどのような場合に異同を生じてゐるのかを、古本説話集を中心に考えてみると、次のようないことが考

えられる。

(A)の場合

(用例番号)

- ・前後に類似表現がある……………③
- ・前後に異文がある……………①
- ・該当部分が傍書されている……………④

(B)の場合

- ・前後に類似表現がある……………③
- ・前後の文脈に誤りがある……………①⑥
- ・該当部分が傍書されている……………⑦

(C)の場合

- ・前後に類似表現がある……………③

すべての用例について、異同が生じた理由を明確にすること  
 はできないが、そのうちのいくつかは右のような場合である。  
 まず、前後に類似表現がある場合に異同が生じている。これは  
 類似表現のくり返しを避け、表現が単調にならないようにする  
 ために、文を終止したり繰り返したり、あるいは接続語句をかえたり  
 するためである。また、古本説話集において文脈が乱れたり  
 書写上の問題がある場合にも異同が生じている。これは、古本  
 説話集の筆録者が前後の文脈をあまり考慮せずに筆録したため  
 であろうか。

ところで、両書にこのような異同がある場合、どちらが優れ  
 ているかを判断してみると、前後の文脈から明らかに優劣の判  
 断がつくと思われるものは、(B)①②③⑥の四例であるが、これ  
 らはいずれも宇治拾遺物語の方が優れている。このことから考  
 えらるべきことは、古本説話集の場合、あまり文脈を考慮せずに  
 文を続けることがあるということであろう。

最後に、永積氏の指摘された古本説話集の文章が非常に論理  
 的であるという点については、接続語句の異同という面からだ  
 けみると、むしろ宇治拾遺物語の方が文章として論理的では  
 ないかとさえ考えられる。たとえば、(A)のような例をみると、  
 古本説話集は宇治拾遺物語より短文を連ねていく(接続語句を  
 用いず)傾向があるようにみえるが、その場合の宇治拾遺物語  
 における接続語句の用い方はと考えてみるとむしろ有効適切で  
 さえある。それに対して(B)の例の中にもあつたように、古本説  
 話集の接続語句の用い方には問題があるものがある。このよう  
 に考えると、宇治拾遺物語の文章の方が論理的であると言えそう  
 であるが、この点については今後の更に詳しい研究をまちたい。

(注一) 高橋貢「説話の二系列について」国文学研究21集  
 (注二) 山口佳紀「今昔物語集の形成と文体」国語と国文学 548  
 (注三) 野口博久「古本説話集の成立と宇治拾遺物語」言語と文  
 538,7